

名古屋市立大学及び同看護学部について私が考えてきたこと —大学広報への寄稿から—

小 玉 香津子

1 看護学部の静かな船出

4月、本学に看護学部が発足する。私はここ1年ほどその開設準備に携わってきたが、余所者の自由労働者といった立場故の傍目八目があったにせよ、何とも安直に学部をつくるものだと思うにはいられなかった。あちらこちら隙だらけであることを痛感しているの、とてもいま夢や希望を能天気語るわけにはいかない。とりあえず出来たのは書面の上のかたちだけ、言わばその紙の舟をこれから恐る恐る海に浮かべるのであるが、沈まぬうちに鋼鉄の船に造り替えていくことができるだろうか。せめて木の船にでもすることができるだろうか。

しかし、この事態は悪いばかりではないようである。そういう次第であれば、名古屋市立大学看護学部は無闇に胸を張ることにはならず、いや胸を張ったら愚かしいのであって、静かに出発し、自然体で謙虚にやっていくほかないからである。もっとも、看護系大学が全国にこれだけ普及した現在、大学における看護教育にもはや実験性は乏しく、看護教育一般に革進的な変化を起こす作用因子としての役割は希薄になっている。不足なところが多いうえに後発校であるわれわれが、大学学部だからと勢い込む必要は少しもない。としても、これがもしも鳴物入で発足するとしたら、われわれもそう淡々としてはいられず、恰好をつけたり実力以上に見せたくなったりして、結局は、内容のある発展はないだろう。

この期に及ぶと有難いことに、少し前なら看護が大学に入る際に必ず問われて当事者を困惑させた“看護学とは何か”については、かなり具体的な答が出ている。看護学が独自の知識基盤をもち、それを増やしつつあること、それらは生物学的色彩の強い医学よりはむしろ心理社会学系の学問に多くを負っていることを、日本ではこの4半世紀ばかりの間に、先発の看護系大学が中心となって明らかにしてきた。看護が何をしておき関心を寄せるのは、たとえば疼痛体験や病気受容などの患者の体験であり、それらを説明する理論は看護学の主要な構成要素である。この種の知識を手にする以前は、看護は患者の体験をではなく病気を説明する医学の知識を使っていたのであった。また、看護はそうした患者をケアしたりコントロールしたりするのだが、その方法や技術の根拠を

示すセルフケア理論やコーピング理論などの知識も看護学の主要な構成要素である。この種の知識を手にする以前は、看護はケアやコントロールの根拠ではなく診断や治療の根拠を示す医学の知識をもっぱら使っていたのであった。

われわれはここまで伸びている看護学の路線に直ぐと乗ることができる。大学レベルの教育と研究の道筋が見えているのであるから、もろもろの不足はあるが何とか前進できるだろう。

データはまだそろっていないものの、看護の大学教育が普及したことに関連づけてよいと思われる好ましい変化のきざしがある。医療一般が人々のさまざまなヘルス・ニーズによりよく応えるようになった様子、そして、より人間味のある医療が実現しつつある気配、である。これで分かるように、看護学は方向を間違えさえしなければ人々の幸せへと一直線につながる。それを思うと、いざ出発するわれわれの小舟は、沈めてはならないし沈められてはたまらない。少なくともこの心意気だけは満載し、静かに漕ぎ出でよう。

(名古屋市立大学広報第417号、平成11年2月20日)

2 看護学部の強気な航海

鳴り物もなく静かな船出をした看護学部はいま、波乱含みながら無事に航行している。2年後には、完成年度を記念する旗を立て、最初の目的地に入港したい。のびやかに育ち、頭と心を十分に鍛えた第1回生をそこで降ろし、海賊さながらの手強い大学院生を迎えることになれば、ひとまず安心できるだろう。

しかしわれわれが沈没しないまでも漂流に至るのではないかとおぼつかながる向きのあることはわかっている。今年度、本学は大学基準協会による相互評価を受けたが、教育研究水準の向上を目指す大学全体の努力の状況を総合的に評価するその過程において、看護学部だけ特別に、教育と研究の活性化戦略を質された。看護学部が名古屋市立大学の足を引っ張っている、とまでははっきり指摘されなかったものの、われわれの弱体ぶりは大学全体の問題であるというニュアンスである。

相互評価の結果が最終的にどのようなかたちで出てく

名古屋市立大学及び同看護学部について私が考えてきたこと

るかはわからないが、とりあえずの講評では、“名古屋市立大学は看護学部をあたたく見守るように”ということであった。“あたたく見守る”とは、こそばゆいではないか。学部長としては、おありがとうございますと頭を下げつつ、自助努力する決意を固めるばかりである。

思えば、前世紀も早い頃のアメリカで、ユニヴァーシティ・スクールと通称された大学看護学部の開設が続き、それらが備えるべき3つの条件がうたわれた。昨今がちょうどその時期にあたる日本では、誰も正面からこれを問わず、本学の場合も然りであった。その条件とは、第1に、“その大学の他の学部認められている権利と特典のすべてを許されている学部であること”である。われわれは開学部当時この点の確認が甘かった。最近行われた学生生活調査に看護学部生の不満がみてとれる。遅ればせながらわれわれは、日々油断なく構えて学内のものもろに対処することにより、事態の建て直しに努めよう。条件の第2は、“特定の必要条件を満たした学生であること”である。これについては学部の入学試験検討プログラムがすでに追求行動を開始している。この条件のクリア水準を追い追いかけていくことさえできるだろう。

難題は第3の条件“専門職教育の創始、存続、今後の発展に不可欠な諸資源をもつこと”である。相互評価の講評もつまるところここを指している。看護学部は資源が乏しすぎるのである。

自助努力すると見得を切ったが、われわれの物的資源の不足に対してはそれに限りがある。当面はせいぜい学内で“侵略”や“略奪”まがいを試みるほか手立てはないだろう。本音をいうと、整然として優雅な大学生活を学生と教員が共にすることのできるキャンパスがあれば、とくに教育上どんなに好ましいことか。しかしそれを願う前に、われわれは人的資源の確保に自助努力を集中させねばなるまい。すなわち、教員各人が学部の存続と発展に不可欠な存在とならねばならず、ここには大いに自助努力の余地がある。教員各人が教育研究上の己れの力を厳しく測ることから始めよう。その結果、各人の力不足は否めないとわかって、それならば互いに協力してやっていけばよいではないかなどと考えるのはよそう。問うべきはあくまでも各人の力である。不足は各人において補われなければならない、また各人は己れの力を測る内なる基準をいよいよ高くすることを求められる。

看護学部はかように、エンジン全開で進む。名古屋市立大学はわれわれを信じ、この船の行く手に希望をみしてくれるだろうか。それが“あたたく見守る”ことだとわかってくれるだろうか。

(名古屋市立大学広報第441号、平成13年2月28日)

3 改革とは、何か別のものにするのではなく、 目指すものに近づくこと

表題は、本学の改革モード始動・加速のただ中で、看護学部が掲げている旗印である。本学の改革がモードではなくもしかしたらムードなのか、あるいは、トレンドでさえなくファッションにすぎないのか、と思われるような時、看護学部はこの旗を密かに色あげする。“むやみに枝を広げるよりも根を深く張らせることに打ち込むこと”とフロレンス・ナイチンゲールの言葉を片隅に縫い取りながら。

看護学部の目指すものは、なまんだとおっしゃるなかれ、当初に計画した教育・研究活動を、不足なく確かに行うことである。ということは、本学が研究重視の大学を名乗っても、すなわち大学院大学化、その初歩的形態である大学院部局化を実現しても、看護学部は、教育にも強く、研究にも強く、をモットーとし続ける。折衷主義が生ぬるいのは承知であるが、両者の平衡をとりつつ1つのまとまりにしていくことが、われわれの改革なのである。

しかしながら、看護学部は決して独善主義ではない。日本中の大学がミーイズムになって、不快な言葉だが“生き残り”をそれぞれ考えているいま、本学の構成単位として、本学の戦略に与するのは当然と心得ている。

大学が生き残るための一般的な対処方向のうち本学はまず高度化を選んだ。これについては、来る4月に看護学研究科修士課程を発足させることをもって、看護学部は協調する。看護学研究水準の飛躍的な向上を計るとともに、本学のユニバーシティ構想(学問分野の拡大と細分化が自在な、研究センターの行き方)に参画することを期して、研究科は可能な限りの専門分化を行った。学部教員の3分の2弱が研究科に関わり、他の教員はもっぱら学部教育を担当、前者の教員群もこれまでと同様に学部教育を受け持つ。当分の間は、重荷を負う用意のできている者がより多くを負うのである。いずれすべての教員が研究科教員となる日が来るとしても、われわれの学部教育が特定の職能教育責任を果たし続けることに変わりはない。ただ、本学の高度化路線にあわせるべく、これからの入学試験では、発展可能性を含めた学力を重視し、研究者予備軍となるような学生の確保に留意しなければなるまい。

生き残りのための一般的な対処方向として本学が選んだその2は、個性化のようである。流行の個性化方策には、国際色を強くすることと並んで看護や福祉の学部等をもつことがあるが、本学は然り、看護学部を6番目の学部とした。しかし、このことが自らの個性化の一環であるとは本学はまだ意識していない。看護学部が加わっ

た結果、本学がどのような個性をもつに至るのかという発想が、どこにもないのである。控え目に言っても、学問的に社会的に看護の株が上ったいま、看護学部をただもっているに止まらず、もっていることによって本学にいかなる個性が出るのか、つまり、その他の学部等がどう変化し、本学はどのような新しい統合体となるのか、を追究することは、本学の生き残り策の1つであろう。僭越ながらこのことは芸術工学部にもあてはまると思われる。後から加わった出っ張りである学部を、本学がどう内包して自らの新たな個性とするか、当事者の看護学部はそのプロセスに、あの折衷主義を貫きながら関与せねばならない。

そうした本学個性化の動きは、生き残りのための対処方向その3、活性化のなかに多分みることができる。活性化は組織運営のあり方に焦点をあてて計られがちであるが、改革とは目指すものに近づくこととする考え方に立つと、学内の対話を盛んにすることあたりから始めたらどうか、と思う。最近の将来構想方針策定作業班会議や教養教育委員会に対話隆盛の兆しを窺うことができるのは好ましい。盛んな対話は、学内各所に対話に長けたリーダーを生み出し、ひいては学外との対話を興すリーダーも生まれ、本学の組織運営は活性化する、という段取りである。看護学部はあらゆる対話へ果敢に加わっていく。実は、教育と研究を進めるいわば学部ミニマムに対話をうたってきたわれわれなのである。

別のものになるような変化は嫌でも、教育と研究をきちりで行うことに異を唱える大学人はいない。大学人は皆、学長から助手の1人ひとりまで、教育と研究を業とする者である、とわれわれは自覚を新たにしている。

(名古屋市立大学広報第461号、平成14年12月27日)

(付記：名古屋市立大学広報に掲載したものを、許可を得て転載しました。)